

市史講座第 8 回ミニレポート

11 月 15 日(土)第 8 回の講座が開かれました。

第一部「中世の経済と社会」(講師:島根大学教育学部教授 長谷川博史先生)



長谷川先生は中世の社会と経済について、戦前と戦後における中世史学の理解を簡単に紹介されました。その上で中世の民衆生活の様子について 15 世紀の朝鮮使節の記録から、季節と地域による違いもあるが、二毛作が行えるように乾田の技術と水力自転揚水車の技術が導入されるなど生産が増加した一面と、飢えた人々が食と銭を窮するなどの過酷な一面も存在していたことを指摘されました。

さらに中世では農業技術の導入という一面から見られるように、近代に先駆けた技術と知識が用いられ始め、また中国の王朝(明・宋)で鑄造された銅銭を利用した貨幣経済の発展と、貨幣利用進展に伴う為替取引の開始など、新しい技術が受け入れられました。それと同時に災

害も多く、人々はそれらの影響を受けやすい環境にあったと説明されました。

たとえば松江地域では、秋上氏が朝酌(朝酌町)の領主である厳島神社の棚守氏に対し、合戦の行われた真山(法吉町)に近く、不作であることを訴えていました。このように災害や戦乱の影響を受けやすい脆弱さをあわせもっていました。

また、島根郡・意宇郡では多様な生業が展開し、海産物・絹製品・紺染・塩生産が発展したこと、および寺社造営の史料から大工・鍛冶の集団が市内にも多く活動していた事例を取り上げられました。

これらの事から長谷川先生は、中世の社会と民衆の生活は過酷な環境と隣合わせであり、技術の発展と導入による生産の向上は、より厳しい環境で生き延びるための人々の知恵であったのではないかと指摘されました。

第二部：「各種地図の変遷からみる松江の近代化」(講師: 島根県立浜田高等学校教諭 阿部志朗 先生)

先生は初めに近世絵図と近代地図の違いについて話されました。近世絵図は絵画的手法で書かれるため、山・谷・川など自然情景が絵画的表現であり、地図としての情報は文字と絵から表記され、更に、山・川・岬などを目印に目測や歩幅で計測される相対的測量でした。それに比して明治以降、近代的技術のケバ表現や陰影、等高線による立体的表現が使われ、地図情報も文字と地図記号で表記されるようになりました。測量も三角測量で長さや面積、高さを測り、縮尺、緯度経度も使用される絶対的測量が行われたものが地図に反映されました。

『松江市史』編纂に伴って松江市関連の絵図・地図の探索調査を行い、多くの絵図・地図が県内外で発見されました。近代地図も多く発見されたのですが、その内から松江の近代化を如実に知る事の出来る代表的地図 3 点を示され、明治期から昭和初期までの松江市の変遷をお話になりました。



・明治 12 年に出された「出雲国松江市街図」

この地図は松江の近代地図として最初に発行されたもので、市制施行(明治 22 年)以前の松江が書かれています。県庁・警察本署・島根師範学校・女子師範学校・付属小学校・松江公立病院・松江監獄署・第七十九国立銀行などが記入されていて、松江が城下町から県庁所在地となっている様相が窺える地図です。明治 9～12 年の 3、4 年間で近代建築を建造したエネルギーが感じられますし、それまでの絵画的絵図を脱した近代的地図手法で作成されたものです。

・明治 44 年頃の「松江市宅地等級概況図」

日露戦争の後の都市化の進展で、都市と農村間で地租負担の不公平さが生じたため、明治 43 年に宅地価修正法とその関連制度(宅地地価修正法施行規則・宅地地価修正実地順序)が制定され、全国一律で土地等級が定められました。これに基づいて土地の等級と賃貸価格が決められました。1 級の土地は 1 坪 1 厘、2 級は 2 厘、3 級は 3 厘など、級が上がるごとに価格が大きくなっていきます。この地図は宅地修正法制定後の松江市内の土地等級が記載されています。

当時の松江市内の地価等級最高値は大橋南詰の 80 等級でした。1 坪が 1 円 60 銭です。明治時代の 1 銭は現在の 200 円位とのことですから、現在価格で 1 坪が 3 万 2000 円位になります。松江城内が 20 等級、松江駅周辺は 50 等級、大橋を挟んだ南北の商店街は 40～70 等級と記されています。現在の土地価格と比較するのも、松江市街の発展の様子を見るのに興味深いかもしれません。

・昭和 7 年の「松江都市計画街路網図」

日本の近代都市計画は大正 8 年の「都市計画法」に始まります。松江市は昭和 3 年に都市計画区域の認可を得て、昭和 7 年に街路網の整備計画を決定しました。この図はその際の都市計画街路 26 路線を図示した地図です。国内一律に街路の種類が幅員によって「広路」「一等大路」「二等大路」「一等小路」「二等小路」のように決められていました。松江には「広路」はなく、一番広い道は雑賀町北田町線で「一等大路三等」(幅員 22m 以上)でした。それを示す「1-3-1」の数字が地図に記載されています。「都市計画街路一覧表」では路線図の等級が解り、その等級が地図の路線に記載されています。

このように、明治になってから近代建築物が建ち、経済の発展とともに市内土地価格が変動し、更に都市計画が目され、街路の幅員も広くなり、更に埋め立てなどで市街地が広がっていく様子が、地図を見る事でも解明できることをお話になりました。